

‘Vscan’ は明日からの循環器診療を変えるか？

産業医科大学第二内科 竹内正明

1990 年台後半に臨床の場に登場したポータブル心エコーは、当初大きな期待が寄せられていたが、ノートパソコン以上の重量がありポータブルというにはあまりにも大きく、手軽に持ち運べないこと、バッテリーの駆動時間が短く結果的に電源ケーブルが必要であったこと、画像の描出方法が fundamental imaging であり、得られる画質が今ひとつであったことなどの種々の理由で市場から衰退していった。一方 2000 年台後半頃からこれらの器械と同様の大きさではあるが、よりハイエンドの機能を持つポータブル心エコー装置が各超音波メーカーから発売されるようになった。これはこれで機能の向上という点では良かったが、大きさが中途半端であり、狭い病棟でベッドの上に置いて検査をすると器械本体が落下しそうになるため、カートに乗せて販売するのが鉄則というポータブルの意味を無視した売り方がされてきているのが現実である。ポータブルエコーの基本は小さくかつ必要最小限の機能を有しているものが望まれる。近年登場した GE 社の Vscan は重量わずか 390g の手のひらサイズの本体に、3.5 インチの高感度液晶ディスプレイを搭載し、harmonic imaging の白黒、カラー B-mode が可能な本当の意味でのポータブルエコーである。これを用いることでベッドサイドでの治療方針の検討、外来でのちょいあてエコー、透析室での水分管理の評価、患者急変時、ハイエンドの装置を持ってくる前の Quick look 等いろいろな用途での使用が可能となった。当日は実際に使った経験を元により具体的なお話をしたいと思う。Vscan は明日からあなたの循環器診療を変えます。

図 1

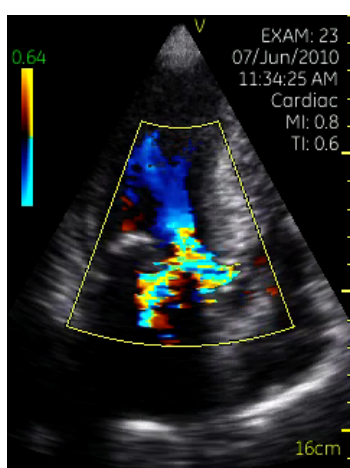


図 2

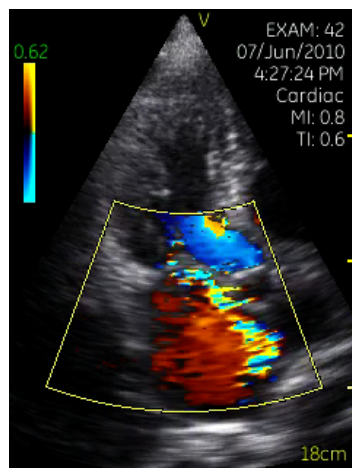


図 3



図 1: 閉塞性肥大型心筋症患者の左室流出路狭窄及び僧帽弁逆流

図 2: 僧帽弁逸脱 (P2) 患者の僧帽弁逆流

図 3: 病棟回診で実際に使用している様子